

近世における参詣行動と歴史意識

— 鎌倉の再発見と懷古主義 —

原 淳 一 郎

I. はじめに

- (1) 本稿の問題意識
- (2) 近世鎌倉と史料の概観

II. 都市知識人層の参詣意識と行動

- (1) 都市知識人層の参詣意識
- (2) 都市知識人層の参詣行動

III. 村落内上位層における参詣行動

IV. 名所の形成と参詣者の対応

- (1) 名所の確立と歴史知識の構築
- (2) 参詣者の考証

V. おわりに

I. はじめに

(1) 本稿の問題意識

近世の寺社参詣を意識レベルでよみとこうとする場合、寺社参詣の大衆化の要因として、都市化の過程で失われた自然への渴望、知的充足感などが説かれる。寺社参詣は信仰的側面と併せて多分にこうした多目的な要素も孕んでおり、一刀両断に論ずることは極めて困難な作業である。自然景観への憧憬は名所の拡大と連動する形で解釈されて一定の成果をあげている¹⁾。ところが、知的充足感という側面については未だ具体的事例の提示ならびに総体的な把握のいずれも進展をみていない。知的充足感に関連して注意されるのは、19世紀に考証家的〈知〉の営為の潮流がみられたことである²⁾。つまり身の周りの

様々な事象の歴史へ関心が向けられはじめたのである。かかる傾向も含めていかに歴史の流れに位置付けるかが課題である。

そもそも歴史とは、『紀記』や『神皇正統記』に代表されるように、従来の歴史の整理と自らの正統性を再確認するためのものであり、政治的支配者の自己主張の手段であった。尾藤正英氏によれば、こうした政治的意図から離れ、自己の社会的実践との関連においてはじめて歴史が意識したのが日蓮であり北畠親房であったとする³⁾。つまり個人の自覚的要素の萌芽である。尾藤氏はさらにそれは当時の一般社会の意識を反映させるものであったとする⁴⁾。さらに、かかる歴史意識は新井白石が登場する頃より、理論よりも実証性に重きをおく学問的研究の方向に磨きがかかり、それが近代の実証史学へと結実すると述べる⁵⁾。

歴史意識の形成に関する研究は、1990年以降急速に盛んとなった分野で、由緒・偽文書による権威と民衆意識の相関関係を探ろうとしたもの⁶⁾が主流であり、由緒論の中で歴史意識にも触れるという形態であった。一方で、幕藩領主による地誌編纂過程を解明しながら歴史意識に迫ろうとする白井哲哉氏の一連の業績⁷⁾もある。また近代天皇制支配の源流を探るところから出発して、19世紀における歴史意識の広汎な勃興を明らかにした羽賀祥二氏の業績⁸⁾もある。

羽賀氏は、19世紀に日本各地で歴史的遺跡・遺物の発掘、考証、記念碑建立の動きが見られることから、郷土史の誕生と共に、民族的レベルでの歴史的考証主義が芽生え、それが近代のイデオロギー支配の根本である近代天皇像の形成を促したとする。これは、安丸良夫氏が「中間的支配層」の文化的素養が近代天皇制支配の受容基盤であるとした議論⁹⁾にも繋がる。

民衆の歴史意識が隆熾する時期は享保期¹⁰⁾とも18世紀後半¹¹⁾ともされるが、政治権力による地誌編纂にしろ、村落共同体の由緒、祖先崇拝、顕彰活動にしろ、公的な歴史意識である。つまり、対外的・対社会的歴史意識とも言うべき、〈外〉に対する必要に迫られて生じた歴史意識であり、造られた権威である。これに対して、広く私的歴史意識の萌芽というべきものはなかったのだろうか。羽賀氏は、歴史を含む自然景観への意識が近世の身分制を解体させる文化イデオロギー構造を形成したとする。だが、そこで論証されるのは専ら共同体の結合、イエの成立に基づく歴史意識である。知識人層に限らず広く一般民衆において、個人レベルでの「過去」への関心の高まりの程度を確認する作業が必要なのではなかろうか。

個の自覚といえば、先の尾藤氏の歴史意識に関する研究が想起される¹²⁾。尾藤氏は、「歴史意識」という用語の曖昧さを指摘し、歴史的知識および歴史認識と、歴史観・歴史哲学とに分けられるとする¹³⁾。その上で、本来的には後者に歴史意識が存在し、ある程度の個人の自覚を前提とするのだが、日本ではこれを敬遠する風潮があったとする。

また私的歴史意識という点で言えば、近世人の教養形成過程の研究もまた視野に入れないといけない。村落指導者層における〈知〉の形成史、書物史はとくに活況の様相を呈している。地方文人や地域文化への着目は、すでに1960年代後半から柴田一氏¹⁴⁾、塚

本学氏¹⁵⁾に見られたが、近年は横田冬彦氏による蔵書論¹⁶⁾、若尾政希氏による書物に基づく思想形成・主体形成論¹⁷⁾など多様なものへと展開している。かかる状況下、知の形成論は旅行史・寺社参詣史とも結節点を見出しつつある。無論地誌や地図の記載事項を寺社参詣史に活用する手法は古くよりある。然るに、近年の特徴として、地誌・地図などがいかなる背景から作成され、受容されたか、あるいは旅をいかに啓発したかという所へ論点がずらされつつある¹⁸⁾。さらには、上杉和央氏のように知識人の地理的知識の形成過程を分析しようと試みる研究も発表されている¹⁹⁾。

こうした諸論を踏まえつつ、本稿では道中記・紀行文類から、近世人による鎌倉への参詣行動の実態を把握する。その上で、彼らを寺社参詣へと突き動かした要因のひとつである近世人の知的充足感への志向を解明する意味において、より「私」「個」に近いレベルでの歴史意識の実態を追求していくこととする。

筆者は、近世社会における社寺参詣の隆盛の背景とその意義を問うべく、文化史・社会史的立場より実態解明を行ってきた。なかでも、本稿との関連で言えば、江ノ島において、元禄から宝暦・天明までの江戸文化を主導した都市知識人層²⁰⁾が17世紀段階からその聖地以外の特性を見出し、名所構造に変容をもたらした。一方庶民参詣層の間に、「遊人」と呼ばれた彼らへの一種の憧れ、そして知識欲、教養への自覚の萌芽に基づく文化的な上昇志向が見られ、かかる文化受容の拡大構造が江ノ島の行楽地的側面を構築したことを明らかにした²¹⁾。この視点を本稿の事例である鎌倉においても保持したい。

なおある面歴史地理学では、小野寺淳氏²²⁾、岩鼻通明氏²³⁾の論考に見られるとおり、信仰か遊山かという点が議論の焦点であった。しかし本稿ではそこには一定の距離

を置く。近世までの旅行を参詣ないしは参詣の一環と捉え、参詣の概念の変容、形態の変質を議論の俎上に乗せることが重要であると考え。論題及び本文において一貫して「参詣行動」の語を使用するのは、かかる意図による。

(2) 近世鎌倉と史料の概観

本稿の対象とする鎌倉の近世史は、『鎌倉市史』近世通史編²⁴⁾でようやく光が当てられたが、それまでは中世史から見れば格段に関心が低く、紀行文・鎌倉絵図・名所記などの類の発掘、作者特定や年代測定など基礎的作業の段階にあった²⁵⁾。それでも近年は、それぞれ関心は違うものの、近世の鎌倉に対する関心は高まりつつあると思われる²⁶⁾。鎌倉の近世史は、中世前期における政治的中心都市から近代以降の観光都市へと移行する過渡期にあたる。近世前期において寂れていたこの一地域が観光対象として再発見されていく過程は、歴史意識の形成の問題と不可分ではないと考える。公儀権力維持・強化のための儀礼重視社会という近世社会の特質を考えた場合、武家の聖地としての鎌倉のあり方はその格好な材料となる。徳川幕府が鎌倉幕府の正当な継承者であることを強調することで国家権力を維持しようとしたように²⁷⁾、参詣者個々が鎌倉への対応において如何に差が出るかが、当時の歴史意識形成の程度を把握する一定の指標となるだろう。

本稿で対象とする史料は旅日記類である。本稿ではこれを分析するに当たり、居住地により二つに分類した(表1・表2)。それぞれの特徴を指摘すれば、前者は都市知識人層となり、ほぼ全てが紀行文である。後者は村落内上位層であり、おおむね道中日記であるが、若干紀行文的なものも含む。なお付記すれば、都市知識人層は江戸在住の地方藩士も包括する。また村落内上位層には、地方文人層と呼ばれる神主・医師なども含容される。

これらは、あくまでも分析概念に過ぎず、総体としていかなる差異が浮き彫りとなるかを見ようというのであって、あまり厳密に過ぎる必要はないだろう。以下、都市知識人層をⅡ章で、村落内上位層をⅢ章で検討し、その上でⅣ章で名所の形成と参詣者の対応について述べることにする。

Ⅱ. 都市知識人層の参詣意識と行動

(1) 都市知識人層の参詣意識

鎌倉は、近世後期には豊夥となる江戸近郊名所の中において、一早く構築された名所である。だが、初期の参詣はごく限られた階層によるものであった。代表的なものは、元和2(1616)年『丙辰紀行』の林道春(羅山)、寛永10(1633)年『鎌倉順礼記』の沢庵宗彭、延宝2(1674)年『鎌倉日記』の徳川光圀などである。また万治2(1659)年『鎌倉物語』、貞享2(1685)年『新編鎌倉志』といった名所案内記類もこの時期である。それでも、17世紀後半より次第に隆盛の兆しが顕著となり、鎌倉絵図の在地版元が出現した。かくの如く、17世紀の鎌倉参詣を支えたのは都市知識人層である。

元禄7(1694)年『塔沢紀行』の筆者藤本由己は、箱根塔ノ沢での温泉湯治の帰路に鎌倉に立ち寄った。彼は柳沢吉保に仕えた医師であり、狂歌師でもある。その部分を引用してみよう(史料中の下線部は筆者による。以下同様)。

【史料1】六日(中略)

藤沢のこなたくるまだといふ所より鎌倉に入、かたせ川を越て江ノ島に渡る。聞しにまさりて海岸四美の所なり、日くれてかまくらにつく。雪の下にとまりぬ。

七日、つるが岡の八幡にまうず、松の風、峯のあらし、うらの浪、鳥の声もひとつにひゞきあひてをのづからすゝしめのしらべと聞な

表1 都市知識人層の鎌倉内参詣行動

	出発年	史料名	出発地・著者	行動類型	案内者等	鎌倉到着日	鎌倉出発日	出典	備考
1	寛永10 (1633)年 11月	鎌倉順 礼記	沢庵宗彭 (臨濟僧), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島- 鎌倉)	あり	11月 3日	(11月 7日 以降)	『鎌倉市史』近世近 代紀行・地誌編	鎌倉五山焼香順 礼, 時代考証的な 記述は見られず。
2	延宝2 (1674)年 5月	鎌倉 日記	徳川光圀, 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島- 鎌倉)				『鎌倉市史』近世近 代紀行・地誌編	地誌編纂のため の調査
3	延宝8 (1680)年 4月	鎌倉紀	自住軒一器 子(4名), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)		4月 13日	4月 15日	『鎌倉市史』近世近 代紀行・地誌編	
4	宝暦6 (1756)年 8月	鎌倉 三五記	紀伊国屋文左衛門 (材木問屋, 4名), 江戸	周回型、不明 (戸塚-鎌倉-不明)		8月 14日	(8月 17日)	『鎌倉市史』近世近 代紀行・地誌編	鶴岡八幡宮放 生会見物
5	明和4 (1767)年 4月	東路の 日記	婦人(数名の 男女の供), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)	あり(雪 ノ下, 2日 間)	4月 12日	4月 14日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	江戸ノ島参詣
6	寛政9 (1797)年 閏7月	相中 紀行	田良道子明浦(下野 駒山藩藩士, 2名), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-鎌倉-金沢)		8月 3日	8月 6日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	塔の沢
7	享和1 (1801)年 1月	三浦 紀行	白英(俳 人, 4名), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)		1月 25日	1月 26日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	浦賀奉行水野 忠良家臣山室 随風の訪問
8	文化2 (1805)年 9月	江の島	大島完来(俳 人, 3名), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-鎌倉-金沢)				『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	途中で土地の俳人との 句会を開催しており、 鎌倉でも2回開催
9	文化4 (1807)年 3月	我衣	加藤曳尾庵(医師・ 寺子屋師匠, 28名), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-鎌倉-金沢)		3月 16日	同日	『日本庶民生活史料 集成』5	百味講による 江戸ノ島参詣
10	文化6 (1809)年 4月	鎌倉 日記	周金亭陶枝(商人 家族・供数名), 江戸	周回型、不明 (江戸ノ島-鎌倉-不明)	あり(雪じぶ から付き合ひのあ る者の参詣)	4月 18日	4月 20日 以降	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	参詣の経緯は不明であり、参詣の 人数も不明だが、参詣先が鎌倉・ 金沢・江戸ノ島と推定される。
11	文化11 (1814)年 5月	鎌倉 三勝 日記	岩村恭入(狭山 藩士, 3名), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)	あり(雪ノ 下より, 吉 兵衛)	5月 10日	5月 11日	『神奈川県郷土資料 集成』6	鎌倉・江戸ノ島・ 金沢遊覧
12	文化12 (1815)年 4月	我衣	加藤曳尾庵(医師・ 寺子屋師匠, 2名), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-箱根塔ノ沢- 藤沢-鎌倉-金沢)	あり(雪ノ下 より, たがや 敷の老人)	5月 2日	5月 3日	『日本庶民生活史料 集成』5	
13	文政4 (1821)年 4月	江の島 の記	菊地民子(豪商 佐野屋の妻), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)	あり	4月 13日	4月 14日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	江戸ノ島参詣
14	文政4 (1821)年	遊歴 雑記	十方庵敬順(真 宗僧侶, 4名), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-鎌倉-金沢)		25日	26日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	7度目の鎌倉 訪問
15	天保6 (1835)年 3月	四親草	松雨(武 家, 4人), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-鎌倉-金沢)				『神奈川県郷土資料 集成』6	
16	天保6 (1835)年 4月	鎌倉 御覧 日記	小山田与清 (考証学者), 江戸	周回型・簡易型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)		4月 15日	4月 16日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	帰洛する智恩院 宮尊昭法親王の 御供(藤沢迄)
17	天保10 (1839)年 4月	玉匣両 温泉 路記	原正興(沼田 藩学者か), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-鎌倉-金沢)	あり(雪ノ下 より, 目録の趣 で参詣)	5月 6日	5月 7日	『江戸温泉紀行』(東 洋文庫472)	箱根・熱海温 泉旅行
18	弘化2 (1845)年 1月	江戸ノ島 参詣 之記 (書写)	森七三郎 (吟味役), 江戸	周回型、三所参り (江戸ノ島-鎌倉-金沢)		(1月 18日)	(1月 19日)	『神奈川県郷土資料 集成』6	江戸ノ島講の代 参講か
19	安政2 (1855)年 4月	江の島 紀行	李院 (女性), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)	あり(雪ノ 下から, 子 供)	4月 20日	4月 21日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	
20	安政6 (1859)年 8月	東海 紀行	小田切日新(不祥 婦・母と一緒に), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)	十二所村 で鎌倉図 を購入	8月 20日	8月 21日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	江戸ノ島参詣
21	年不詳 5月	鎌倉 日記	祖祐(男女5名), 江戸	周回型、三所参り (金沢-鎌倉-江戸ノ島)		4月 21日	4月 22日	『鎌倉市史』近世近 代紀行地誌編	

注1) 原則として鎌倉内の行程がはっきりと判明するもののみ取り上げた。また安永8年の『山東遊覧志』は、地誌のように編纂され、実際の行動を示しているとは考えにくい。省略した。

注2) 鎌倉内の行動が不明であるため本表から止む無く除いたが、本文中に触れている旅日記・道中記がある。

表2 村落内上位層の鎌倉内参詣行動

	出発年	史料名	出発地・著者	行動類型	案内者等	鎌倉到着日	鎌倉出発日	出典	備考
1	享保7 (1722)年 6月	坂東順礼湯 殿山道中記	武蔵国大谷村奥富万太郎 (名主, 5名)	巡礼型		7月 18日	7月 19日	『越生の歴史』近世史料	
2	宝暦12 (1762)年 閏4月	東海済 勝記	播磨国高砂三浦迂斎 (大庄屋, 4名)	簡易型		閏4月 9日	同日	『鎌倉市史』近世近代紀行地誌編	東日本周遊
3	明和2 (1765)年 3月	伊勢参宮・西 国巡拝道中記	出羽国新庄村木村有周 (武士, 7名)	簡易型	簡易型 (金沢, 三所参り 江ノ島・鎌倉・金沢)	6月 21日	同日	『続矢島町史』上巻	
4	明和5 (1768)年 6月	富士日記	安房国和田村池川春水 (医師, 2名)	簡易型		6月 26日	同日	『日本庶民生活史料集成』3	
5	明和5 (1768)年 12月	伊勢参宮 道中記	陸奥国柏木目村中川清蔵 (名主, 10名)	不明	あり (何人にも100文)			『高島町史』中巻	
6	安永2 (1773)年 5月	西国道中道法 并名所秘傳所	陸奥国宝坂村古市源蔵 (名主, 34名)	簡易型	あり (10文)	6月 3日	同日	『源蔵・郡蔵日記』	鶴岡宝物開帳
7	天明1 (1781)年 5月	西国道中記	常陸国下小瀬村岡崎藤七	簡易型		6月 3日	同日	『西国道中記』	
8	寛政1 (1789)年 6月	富士大山 道中記	武蔵国本宿村与兵衛 (5名)	巡礼型		7月 4日	7月 5日	東松山市立図書館蔵	
9	寛政3 (1791)年 6月		信濃国白坂村折井家 (大庄屋)	不明				『松本市史』第二巻	身延参詣
10	寛政6 (1794)年 1月	伊勢参宮所々名 所并道法道中記	陸奥国迫庄兵衛 (10名)	簡易型	あり (10人にて100文)	2月 6日	2月 7日	『伊勢参宮所々名所並道法道中記』	
11	寛政11 (1799)年 6月	道中記	陸奥国大谷成田村残間庄吉 (山守, 肝煎)	簡易型		7月 14日	同日	『大郷町史』史料編2	
12	享和4 (1804)年 1月	道中記	出羽国平塩村杉沼彦左衛門 (名主)	不明	あり	1月 24日	1月 25日	『寒河江市史編纂叢書』	
13	文化3 (1806)年 6月	伊勢道中記	陸奥国長塚村潤秀	簡易型		6月 29日	同日	『近世史資料』双葉町史資料シリーズIV	鶴岡宝物開帳
14	文化9 (1812)年 1月	西国順礼 道中記	常陸国高柴村益子廣三郎 (4名)	簡易型・周 回型		1月 16日	同日	『太子町史料 別冊(9)』	
15	文化14 (1817)年 5月	日本九峰 巡礼日記	日向国佐土原野田成亮 (修験)	巡礼型		5月 8日	5月 10日	『日本庶民生活史料集成』2	
16	文政6 (1823)年 1月	伊勢参宮 旅日記	陸奥国大瓜村阿部林之丞 (菊枝楼繁路)	簡易型	あり (何人にも100文)	1月 29日	1月 30日	『石巻の歴史』第9巻資料編3近世	
17	文政9 (1826)年 4月	万字覚帳	陸奥国大代村渡辺屋権太郎	簡易型		2月 3日	同日	『多賀城市史』第5巻	
18	文政10 (1827)年 閏6月	西国道中 日記覚帳	武蔵国屈巢村朝見富三郎 (45名)	簡易型		閏6月 3日	同日	『川里村史』資料編2近世	
19	文政11 (1828)年 6月	富士禅定 道中日記	下総国諸川新田鈴木松蔵 (7名)	簡易型		6月 19日	同日	『三和町史』資料編近世	
20	天保9 (1838)年 2月	道中記 覚帳	陸奥国大代村渡辺屋権太郎 (12名)	簡易型		3月 1日	同日	『多賀城市史』第5巻	
21	天保9 (1838)年 6月	富士・大山 道中雜記	山斐国府中近郊農民 (6名)	簡易型 (藤沢)	あり (袖ヶ浦)	7月 1日	同日	神奈川県立金沢文庫蔵	
22	天保12 (1841)年 2月	坂東道中記	武蔵国本太村 (吉野家) (名主)	巡礼型		2月 14日	2月 15日	『浦和市史』第三巻	
23	天保13 (1842)年 2月	坂東秩父順附	上総国東栗倉村熊切氏 (組頭)	巡礼型		2月 19日	2月 20日	『君津市史』史料集II	
24	嘉永1 (1848)年 1月	伊勢道中記	陸奥国北沢村 (9名)	不明, 三所参り (金沢・鎌倉・江ノ島)		2月 3日	2月 4日	『津山町史』後編	
25	嘉永2 (1849)年 6月	大江山之 島日記帳	武蔵国蔵宿岡田門五郎 (本陣, 8名)	簡易型 (金沢, 三所参り 江ノ島・鎌倉・金沢)		7月 1日	同日	蔵市立図書館蔵	
26	嘉永2 (1849)年 7月	道中日記帳	武蔵国柏原村久保田太三郎	巡礼型		7月 5日	同日	狭山市立博物館蔵	坂東巡礼
27	嘉永6 (1853)年 5月	伊勢道中記	陸奥国秋保柴田氏 (21名)	簡易型		6月 11日	同日	『秋保町史』資料編	
28	安政6 (1859)年 5月	(略道中記)	佐渡国坊ヶ崎村榎白弥十郎 (名主・長百姓) (4名)	不明	あり (4人分100文)	6月 26日	同日	『両津市誌』資料編	出羽三山・大山参詣
29	弘化5 (1846)年 1月	伊勢道中記	陸奥国太田村三浦与左衛門	簡易型		2月 2日	2月 3日	『桃生町史』第4巻諸史編	
30	万延1 (1860)年 7月	道中日記	陸奥国坂路村坂路河内頭 (神官, 2名)	不明		7月 13日	7月 14日	『石川町史』下巻	

注) 行動類型欄の「簡易型」は江ノ島・鎌倉・戸塚を基本型とするが、必ずしも全てが戸塚を利用しておらず、金沢・藤沢を使用している場合は、その旨()内に記した。

せば、いとあはれに上久たる程いはんかたなし。鳥井にむかへば由比のはまよりなはをはへたるごとくに一すじに見ゆる。代々の武将のやどりしめ給ひたる所なれば、古跡つづきて彼山此寺此社彼屋形の跡などしるすに筆のあゆみつゞくべくもなし、いかさまにしてもゝのひとつも心にとめぬべくおもふかうち、さらぬ要事ども告来ぬれば又もといふ事になして、名残を星月夜の水にうつし契りを鶴が岡の松のちとせにかけて、その夜はとつかの駅にとまりぬ²⁸⁾

引用は藤沢から戸塚までの部分になるが、江ノ島に比して、鎌倉への圧倒的な関心の高さが窺われる文章である。また同時期の『新編鎌倉志』において、江ノ島と金沢は鎌倉名所の一項目として編集されている²⁹⁾。したがって、都市知識人層による当該地域への参詣行動の主たる目的が、鎌倉にあったことが容易に推察される³⁰⁾。

このような17世紀段階における参詣意識は以下のようなものであった。

林羅山は、頼朝の石塔の前で、『吾妻鏡』に載る鴨長明の和歌にちなんて漢詩を詠んだ。

【史料2】頼朝の墓とて人の教へければ、鴨の長明が、草も木もなびきし秋の霜きへて、といへる事を思ひ出て

満目鎌倉城郭亡。雲烟漠々樹蒼々。逍遙昔
聴遊亀谷。報賽今無詣鶴岡。草偃匣中三尺
水。苔深墓上五更霜。君公不識包桑計。千
載英雄淚湿裳³¹⁾

羅山は、千載の英雄の墓が苔深く、誰の墓だか分からないほどに桑で覆われていることに涙している。同じ事が、延宝8(1680)年の『鎌倉紀』の作者自住軒一器子にも見られる。彼は

【史料3】昔鴨長明此御堂に來り頼朝の終り給ひし事をおもひ出て、草も木もなびきし秋の霜きへてむなしき苔を払ふやま風、とよみて堂の柱にかき付てけるとは聞及ぬれど、今は柱だにしかくそはぬ程なれば、

山風の空しき苔のあととへは その言の葉もくち果にけり

すこし山をのぼりてちいさき石塔有。頼朝の石塔といへど、所は廟の跡成べし。しるしの石はあらぬものの墓を取すへたる物也。いかで上古の風なればとてさだか天下のあるじたり³²⁾

と述べ、羅山と同様に『吾妻鏡』の故事を引き、和歌を詠み、一度は天下を治めた人物の墓が寂れている状況に憐さを感じている。そしてこれは各自の歴史観を反映した表現とも言える。17世紀までの参詣者は、眼前にある歴史的遺物に対して自己を没入しすぎず、客観性を保っているところが特徴である。自住軒一器子にしろ、藤本由己にしろ、直接的な感情表現が見られず、行間から読み取れるという程度のものである。これは、歴史的素養と深く関連している。高度な歴史的素養を背景に、自ら客観的であろうとしたためである。

ただし一方では、確実に中世への懐古の情の発現をみてとることができる。懐古の情とは、単なる懐古趣味ではなく、より確かな物をつかもうとする、永遠なるものへの希求を内包している。『鎌倉紀』には、「武家の天下に成りし始の地なれば(中略)代々の祈願所・廟所とて宮も寺も数おほく、伝記さだかにして。靈仏おほ」³³⁾しという記述がある。そこでは、鎌倉の持つ歴史の正統性が基本的な前提となっている。17世紀末までの参詣者は、歴史的素養を備えた知識階級であり、元禄文化の担い手層よりもやや上位である。これは尾藤正英氏が元禄文化の要因として指摘した武士の身分的不安定さ³⁴⁾と不可分では

ないだろう。武士階級、武家に仕える儒者や医師などが、自己の身分の根元を、「鎌倉」といういわば武士の聖地に求めたのである。この意識は、後に安永8(1779)年の薩摩藩による頼朝墓・島津忠久墓整備³⁵⁾、文政10(1827)年の長州藩による大江広元・季光墓の整備³⁶⁾などの具体的行為として立ち現れてくることになる。

18世紀に入ると、社会的状況の変化と共に懐古主義的な傾向が広溢し、より明確な形となって現れた。天明4(1784)年の『東遊記』の筆者橘南谿は、伊勢出身の京の医師・医学者である。本書は、京を出て陸奥国まで東日本を遍歴した際の書である。

【史料4】東武通行の人の見る所にして、珍しからねど、又したしく其地に臨めば、昔の倂、山川別しては神社仏閣に残りて、懐古の情にたへず³⁷⁾

この紀行文で、昔の面影が残り懐古の情に堪えないとの感想が述べられ、具体的な感情の発露が見られる。この傾向はその後顕著となり、江戸の俳人一鶴堂白英の享和元(1801)年の紀行文では、

【史料5】鎌倉の大意は、去卯年大山へ参り、紀行委敷記し置しかば、此度は只通りし所ばかり記し侍る。されども詣来ても上久わたり勇ましく尊くぞ思はれ、昔三代の盛んなりし事など古き史にも見るに就け、涙ぐみて、漫ろに過し事ども思ひやらるゝ³⁸⁾

と、昔の鎌倉の歴史を思うと涙ぐんでしまうというやや大げさとも言える表現が見られる。同様に、江戸の俳人祖祐も、文政頃の紀行文で頼朝の屋敷跡を前にして、

【史料6】治承四年の頃より此処に移りまして治め給ひしも、今八民之家などまばら

に、田畑となりて往昔を思ひしのばれて、見るも中々に泪なりけれど³⁹⁾

と記し、さらに山ノ内の禅興寺(元最明寺)に赴き、

【史料7】乍恐古代の御墳墓名将の御名残りて猶思ひ見奉ればいと尊く、偲仰の頭自らたて拝伏くし奉りて

恐れ伏す泪や袖に汗拭ひ 祐⁴⁰⁾

と、時頼の五輪塔の前でひれ伏し涙を浮かべている。18世紀を跨ぐと知識人層にも変化が見え、自己の内面に深く歴史的情景・事実を刻み、それを何らかの表現形態によって発散しようとする傾向が見出せる。感情の素直な吐露が見られるようになるのである。

こうした紀行文上における記述を踏まえて鎌倉の名所としての特質を探ると、それは単純に歴史的遺物を訪れるだけの行為ではない。橘南谿の紀行文に「懐古の情」という文言が見られたが、これが鎌倉の旅の大きな構成要素である。江戸の医師であり、寺子屋師匠でもあった加藤曳尾庵は、文化12(1815)年の旅で、

【史料8】九年以前并六年以前に見物したる時よりは、鎌倉だんだん花美に成て古色を失ふ事なあげかわし。既に百四五十以前に澤庵和尚の紀行に曰、建長寺、圓覚寺に詣ふで、佛に香奉らんと思ひたるに、寺中に火の気ある所更になしとも見へたり。其比などは又今よりは殊勝にこそありし⁴¹⁾

と、9年前・6年前に来た時より、段々華美になって古色を失うことは嘆かわしく、沢庵和尚が鎌倉を訪れた頃(寛永10(1633)年)は、今より殊勝であつただろうと感想を述べている。

次の松雨と号する武家の紀行文でも、同様

な認識が見受けられる。彼が天保6(1835)年に江ノ島・鎌倉・金沢の三所を訪れて名所比較を行った部分を以下にまとめた。

鎌倉「懐旧感慨の情を起さしめ」「かまぐら
の古事」「鎌倉の荒涼に古を忍び」

江ノ島「風流華月のおもいを止めし」「江の
島にまうて」「江のしまの浄域に塵胸を
あらひ」

金沢「風流華月のおもいを止めし」「金沢の
勝景」「八勝に他日の鬱陶を散す」⁴²⁾

このうち鎌倉部分のみを総括するならば、
鎌倉は、その古事によって「懐旧感慨の情」
を惹起させるが、それには「鎌倉の荒涼」が
欠かせない、ということになる。つまり、決
して華美になどならず、荒涼とし、古色蒼
然たる様こそが魅力なのである。十返舎一九
作の案内記『滑稽江ノ嶋土産』(文化6
(1809)年刊)においても、

【史料9】鎌倉ハ武備兵将の居なるものなり
と云云、此故に、鎌足の玄孫、染屋太郎太夫
時忠、居住せしより以来、累代武将相伝の在
地として、麗異勝景の旧趾、今詣人の眼を驚
し、松風羅月の感情をおこさしむること、往
事大厦高楼のありけん程を、想像するの余り
なり⁴³⁾

とあり、大家高楼があった時を想像すること
で、「松風羅月」の感情を誘発されるとされて
いることから傍証できよう。鎌倉の名所
は、その寂寥さにこそ特質があり、数多く残
る寺社、旧跡を眼前にして古に思いを馳せる
ことが、鎌倉への旅の本質なのである。この
都市知識人層に生まれた「懐古主義」的な潮
流は、単なる懐古趣味というわけではない。
一種のロマン主義な側面をも内包しているの
である。いわばジョン・アーリのいう「ロマ
ン主義的なまなざし」に近いものと言えよ
う。アーリはそこには「孤独」、まなざしの
対象との個人的で半ば精神的な関係」があ

り、それを支えるものはその個人の知的収容
能力であるとする⁴⁴⁾。ロマン主義とは、一般
的には産業革命後近代社会突入の反動として
生じた文化的潮流である⁴⁵⁾。また広義に捉え
れば、転換期における自然を含めた世界との
新しい調和的な関係の回復あるいは創出をめ
ざす運動であり、文学や芸術にとどまらず、
政治や科学・宗教にまで及ぶ⁴⁶⁾。その思想は
中世への憧憬、古きものへの回帰・懐古、永
遠なるものの希求、幻想、不安と孤独感と
いったものである⁴⁷⁾。

上述のような傾向は、17世紀という未曾有
の耕地大開発・人口増加の時代の終焉と共に、
17世紀中から都市知識人層の間に共有され
ていった過去への「懐古の情」がより明確
に具体化された一例であろう。さらに過去へ
の反省と低成長・不景気の時代に突入し、よ
り一層自らの身分的不安定さをも露呈した⁴⁸⁾
ことが過去や歴史への興味を引き起こしたの
であろう。元禄文化以降とくに文化的側面
において肥大化する現実主義は、一見矛盾す
るようだが、かかる確かなものを掴もうとす
る「懐古主義」的側面も内包していた。

(2) 都市知識人層の参詣行動

次に鎌倉内における都市知識人の行動をみ
ていきたい。表1は、都市知識人として分類
した人々の手による紀行文を表示したもので
ある。その多くは江戸在住者である。表1の
著者欄にある通り、武士、上層町人、学者、
医師、寺子屋師匠、僧侶など多様な職種を含
むが、彼らは従来都市文人層・知識人層と呼
ばれてきた文化形成主体と言える層である。
彼らの紀行文は、名所ごとに縁起・由来・歴
史について一々述べるという史料の性格もあ
るが、鎌倉内にある名所旧跡のみならず、小
名所についても詳細な記述が目立っている。

その行動パターンで最も特徴的なことは、
同じ宿(雪ノ下)に連泊して、そこを基点に
3～4日(2泊～3泊)掛けてじっくりと廻

るということである。この事実自体は驚くべきものではないが、村落上位層と比較した時完全に異なる性質を見出せる。表3は都市知識人層（21人）と村落内上位層（27人）が、それぞれ鎌倉内において訪れた回数別に示したものである。坂東巡礼をする巡礼型

（後述）の6名を除いて両者同数（21人）で考察すると、村落内上位層が訪れた総数34名所に対して都市知識人層のそれは242名所にも上る。例えば『東海道名所図会』に掲載された鎌倉の名所は122箇所であるから⁴⁹⁾、如何に丹念に名所を掘り起こしていたか歴然と

表3 都市知識人層と村落内上位層の鎌倉内名所訪問数

都市知識人層 (21)			村落内上位層 (27)		
			簡易型 (21)	巡礼型 (6)	
鶴岡八幡宮	21	禅興寺（最明寺跡）	5	鶴岡八幡宮	20
長谷寺（長谷観音）	19	阿仏尼屋敷跡（月影谷）	5	長谷寺（長谷観音）	17
建長寺	19	針磨橋	5	建長寺	15
大仏	17	弁慶腰掛松	5	円覚寺	14
星月夜井（星井）	17	塔辻（大町村）	5	大仏	15
御霊社	15	盛久首座	5	御霊社	14
円覚寺	14	甘縄明神	5	頼朝館	4
極楽寺	14	畠山石塔	5	東慶寺	4
朝比奈切通	13	芭蕉塚	5	長寿寺	4
荏柄天神	13	補陀落寺	5	新居閻魔堂（円応寺）	2
稲村崎	12	報国寺	5	景清土牢	2
新居閻魔堂（円応寺）	12	北条屋敷	5	甘縄明神	2
景清土牢	11	扇谷管領屋敷跡	5	英勝寺	2
光明寺	10	底抜井	5	星月夜井（星井）	2
寿福寺	10	島津忠久墓	5	虚空蔵堂	1
滑川	10	覚園寺	5	冷泉為相石塔	1
日蓮袈裟懸松	10	田代観音（安養院）	4	阿仏尼石塔	1
頼朝石塔	9	綱引地藏	4	杉谷弁財天	1
頼朝館跡	9	鉄井	4	浄妙寺	1
虚空蔵堂	9	浄光明寺	4	三面大黒天	1
光触寺	8	大江広元墓	4	蛇形弁財天	1
大塔宮土牢	8	塩嘗地藏	4	矢栖地藏	1
長寿寺	8	馬冷場	4	北条屋敷	1
東慶寺（松岡山）	8	公方屋敷	4	薬師十二師尊	1
浄智寺	8	（浄妙寺村尊氏館跡）	4	盛久首座	1
光則寺（大梅寺）	7	源氏山	4	尊氏屋敷跡（扇谷村）	1
英勝寺	7	扇井	4	巽荒神	1
十六井（弘法加持水）	7	阿仏尼石塔（阿仏屋敷）	4	勝橋	1
海蔵寺	7	裁許橋（西行橋）	4	六角堂の廻堂	1
法華堂	7	小袋坂	4	人丸姫塚	1
杉本観音	7	以下訪問数3回22箇所		十六井	1
冷泉為相石塔	6	2回52箇所		扇井	1
浄妙寺	6	1回97箇所		綱引地藏	1
梶原屋敷	6			十一人塚	1
歌橋	6				
人丸墓（塚）	6				
鍛冶正宗屋敷跡	6				
妙本寺	6				
水無瀬川	6				
山ノ内管領屋敷	6				
安国寺	6				
明月院	6				

注）表1・表2の史料より作成。ただし村落内上位層に関しては鎌倉内の行動が詳細に分からないもの（3点）については省略した。

する。そこには非常に高い目的意識が読み取られ、事前に歴史書・軍記物や『新編鎌倉志』などの地誌による学習が必要不可欠であったことを示唆している。

今一つ特徴的なことは、近世を通じて、江ノ島・金沢を兼ねた、いわば「三所巡り」の一環として鎌倉参詣が実行されていたということである。表1中の22点のうち20点がこの「三所巡り」を行っている。早い段階から、都市知識人層は、三所の名所としての存在価値を認めていたのである。

また、複数回の訪問であったことも重要な点である。史料上判明する限りにおいても、自住軒一器子は2回、加藤曳尾庵は3回、白英は2回、十方庵敬順に至っては7回目であり、「三所巡り」は都市知識人にとって単に消費されるだけの名所ではなかった。自住軒一器子が「十八年いにしへ十月十四日ただ一日の逗留にて此元へ来しが、その時見しさま夢のやうなれ共」⁵⁰⁾と述べ、また江戸小日向本法寺の僧十方庵敬順が

【史料10】 予前髪のみかしよりゑのしま・鎌倉にあそぶ事今年にいたりて都合七度といへども、罷るたび初めての様に思はれ、心転じ気分快然として面白し⁵¹⁾

と語るように、「鎌倉中」全域を隈無く何度でも実見しようという知識欲の意識が働いていたものと考えられる。

Ⅲ. 村落内上位層における参詣行動

次に村落内上位層における参詣行動を見ていく。表2は本稿で村落内上位層であると分類した筆者の手による道中記を表示したものである。そのほとんどが関東・東北地方の村落住人である。若干西国の者も含まれるが、そもそも西日本村落民による当地への訪問自体が少ないことにも起因しよう。その階層は、表2の著者欄によれば、庄屋・名主、村

医師・神官などであり、その多くが代々村役人を務める家柄であるなど、村落内の知識的牽引者と考えられる。ただし、10名から30名くらいまでの人数による参詣の場合もあり、道中日記の書き手である人物がその指導者の立場にあることは容易に推察されものの、村落内指導者層を含むやや緩やかな総体として捉えていることを前提としている。

彼らは都市知識人層とは明確に異質な行動パターンを示している。表2に鎌倉到着日と鎌倉出発日の欄を設けているが、そこに同日とある例が多く、目を惹く。これはつまり鎌倉に到着したその日のうちに鎌倉を後にしたということであり、全体の約6割強を占める。残りの4割弱も、全国巡礼の1例を除き、全で一泊である。既に都市知識人層に比して、村落内上位層の訪問地が圧倒的に少ないことを述べたが、このことを時間的にも裏付けるものである。

村落内上位層はその行動パターンから大きく2つに分けることができる。一つ目は「巡礼型」である。これは、鎌倉周辺に点在する1番から4番までの坂東札所を、必ず杉本一岩殿―田代―長谷（その逆もあり）の順で廻るものである。むろん札所だけでなく、その合い間にいくつかの主要名所を組み込んでいる。二つ目は「簡易型」である。これは戸塚（金沢・神奈川）―鎌倉―江ノ島（その逆もあり）という順でまわり、なおかつ主要名所のみを廻るものである。坂東巡礼を行う「巡礼型」は特殊なものなので、ひとまず議論の対象外とする。そこで本章では「簡易型」に絞って考察していく。

それでは再び表3を検討してみよう。村落内上位層の「簡易型」には6箇所の主要参詣地があることが分かる。それが鶴岡八幡宮・長谷寺・建長寺・円覚寺・大仏・御霊社である。つまりこれだけに固定されていた。これは極めて不自然な行動パターンである。例えば、極楽寺は参詣者が江ノ島へ向かう場合必

ず門前を通る場所であり、村落内上位層も全員門前を通過していると推測されるが、誰独りとして訪れた記録がない。都市知識人層においては主要参詣地（8位）であったのとは好対照である。かかる主要な名所のみを巡る行動様式を採択した要因は後述することとする。

表3の訪問地を地域分布という視点で見ると、若宮大路を中心として東西に分けるならば、明らかに西側偏重である。東側に存在するのは頼朝館跡と北条屋敷、浄妙寺のみであり、その頼朝館跡と北条屋敷でさえ鶴岡八幡宮門前とも言える場所に位置した名所である。

以上で明らかな通り、鎌倉内西部の主要名所のみを一日か一泊で廻る行動形態が、「簡易型」の特徴である。さらに都市知識人層との差違を明確にすべく、表4と図1をみる。アルファベットは表・図相互に対応させてい

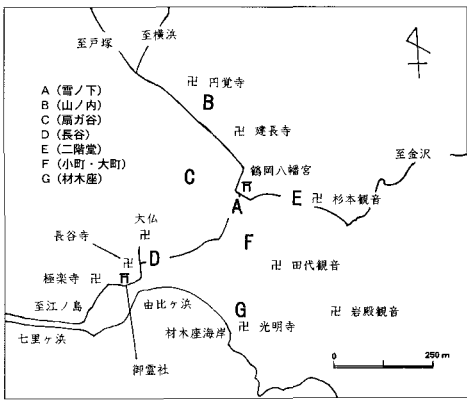


図1 鎌倉内主要参詣路

るが、これは鎌倉内のいかなる方面をいかなる順序で訪れたのかを記号化したものである。都市知識人層は、抽象化することが不可能なほど多者多様の行動パターンを示すが、村落内上位層においては、D-A-Bかその逆のB-A-Dという基本的なパターンを抽出することができる。すなわち、戸塚から入り、山ノ内・雪ノ下・長谷と巡り、江ノ島に抜けるという一定の行動様式を採っていたのである。

村落内上位層の多くが、こうした「簡易型」の参詣経路を一貫して利用した背景を考察しておこう。第一に、案内人雇用（100文が一般的）による案内人主導の参詣であったことに起因するだろうが、都市知識人層においても案内人を雇っている場合もあるので判断はしにくい。第二に道中日記など村落内の先人によって残された書物による情報的制約が想定される。第三に、名所案内記の類の啓蒙が考えられるが、次の事例により明確に否定される。『東海道名所図会』には122箇所の名所が掲載されるが、これを村落毎に分類すると、以下の通りになる。

扇ヶ谷（22）大町（13）雪ノ下（11+1鶴岡）二階堂（11）山之内（10）小町（9）極楽寺（8）長谷村（7）西御門・浄妙寺・十二所・材木座（4）坂之下・大船・堀内・久野谷（2）乱橋・桜山・沼間・小坪・峠・常磐

表4 鎌倉内参詣行動パターンの比較

史料番号	都市知識人層	史料番号	村落内上位層
1	ADABABACECFA	2	ABCD
2	ECAEFGDGBF	3	DA
3	EAEABCAFGAD	4	ABD
5	EABGDCAD	6	BAD
6	DABAFGCAE	7	AD
7	GFACD	10	BCAD
8	DCABE	11	BAD
9	DGDCEBA	13	BAED
10	DFABAGF	14	BACD
11	EABCD	16	BAD
12	BACADGE	17	BAD
13	EAEBCE	18	BA
14	DABAE	19	DBA
15	DABCAE	20	BD
16	EGABAD	21	DAB
17	DGFACBAE	25	DAB
18	DFGFAE	27	BAD
19	EAEBCE	29	BAD
20	EABACD		
21	EABFGD		
計20		計18	

注）史料番号はそれぞれ表1・2の史料番号に対応。またAは雪ノ下（鶴岡八幡宮、頼朝館跡、北条屋敷を含む）Bは山ノ内方面、Cは扇ヶ谷方面、Dは長谷・極楽寺方面、Eは二階堂・十二所方面、Fは小町・大町方面、Gは材木座・森戸方面とした。

(1) (下線部は鎌倉中)

当たり前のことだが、決して西側のみに名所が形成されていたわけでもなく、西側のみの名所を紹介しているわけでもない。このことは、地誌・名所案内記の性格を考えれば言うまでもないことである。第二の要因の影響の強いことは、伊勢参宮の事例等で明らかではあるが、細かい地点に視点を落とせば決して先人の情報を鵜呑みにしていたわけではないことが分かる⁵²⁾。ミクロでは取捨選択の意思が働いていたのである。従って村落内上位層の行動形態は一応選択の手続きを経た上のものと解釈される。そうであればこそ、鎌倉内の行動パターンは第二の要因だけでは説明はつかない。

第四として、歴史的教養・知識の不足にもその要因を求めることができよう。村落内上位層にあって、近隣の相模大山、江ノ島を主目的とした道中日記は見受けられる。ところが、鎌倉を主目的とした道中日記を見出すことは容易ではない。このことから推察するに、村落内上位層が鎌倉を行楽として楽しむほどの歴史的素養を持ち合わせていなかったからではなかろうか。かかることを背景として、結果、道中日記など先人の情報的制約の範疇を逸脱する手段を持ち得なかったのである。そうでなければ、如何に伊勢道中で時間的制約があろうとも、秋葉なり、津嶋なりにおいて取捨選択する人々が上記のような鎌倉内の訪問地偏重の傾向を示すことを理解できない。如何なる史蹟も、歴史的背景を知らない人にとってはただの場所に過ぎない。

ところで、この村落内上位層による参詣の新形態が誕生したのは、表2による限り宝暦・明和期であると言えようが、そこで次の史料から傍証していこう。

【史料11】 差上申御請一札之事

一 私共村方之内老人並子供等農間為渡世年来鎌倉参詣之旅人荷物並道案内稼仕来候処、

去ル天保十亥年中村方案内稼之者共雪ノ下村旅籠屋江休泊案内引付方二付、右旅籠屋より酒食或は酒代と唱ひ骨折銭差出候儀案内稼之もの共任勝手旅人引付方□□内に相成、其上宿屋方二而も酒食料物自然と高直二成行、旅人之難儀は勿論所々衰微に罷成不宜二付、御用之外荷物案内人決而立入不申様被 仰渡奉畏候

尤案内渡世之もの共不作法之義有之候ハバ雪ノ下村宿屋江御立寄

二ノ鳥居より案内之者立入候儀御差留御座候処、弘化四末年六月中歎願書差出候二付、願之通御聞濟被成下難有仕合奉存候、已来案内稼之者共当

御山様

御役人中之鑑札相願御社中迄無差支案内仕様、且不札之儀は勿論雪ノ下宿屋方より酒代等決而申受間敷、若心得違之者候ハバ酒代貰候者共は案内渡世急度差押可申、縦令宿屋より差出候と茂決而受納申間敷之御請書私共三ヶ村名主より差上置候上は□□等之義無御座候筈之処 (中略)

嘉永六

丑年七月

長谷村

名主 半五郎

坂之下村

名主 久四郎

極楽寺村

名主 与五右衛門

同神領名主

市郎右衛門

鶴岡

御一山

御役人衆中⁵³⁾

この史料によれば、天保10(1839)年に、長谷・坂之下・極楽寺村の案内業者(老人・子供)が、雪ノ下の旅籠屋に旅人を紹介する代わりに酒食や酒代として受け取ってい

た骨折銭が高騰して宿側が困窮する事態が生じた。とは言っても、長谷・極楽寺の案内業者側にばかり責任があるとも言えないように、雪ノ下側の史料によれば、他村から荷物案内として旅人を連れてきた者へ酒食を与えていたが、次第に足下を見られる格好となり、余分の酒代を出す方へ案内業者が旅人を連れて行くようになったと述べられる⁵⁴⁾。この結果、天保11(1840)年以降に鶴岡八幡宮により、案内業者が二の鳥居・巨袋坂・大蔵より内に入ることが禁止された⁵⁵⁾。これに対して弘化4(1847)年に長谷村等三か村役人が嘆願書を出して許され、八幡宮の役人が鑑札を発行することで一端は収まった。しかし、嘉永6(1853)年には再び同様な事件が生じ、村役人が再度請書を差し出している⁵⁶⁾。

定を破ると5貫文の罰金或いは旅館業・案内業の停止にもつながりかねない⁵⁷⁾。それにも関わらずこうした行動を繰り返す背景には、これまで述べてきた参詣者の新型参詣行動、つまり「簡易型」の参詣経路の確立があると考えられる。戸塚から入り、山ノ内・雪ノ下・長谷から江ノ島へと向かうという経路をとる村落内上位層の当該地域への参入が、長谷・極楽寺と雪ノ下という地域主導の緩やかな連携を生み出した。そして、このような「簡易型」の参詣経路の確立をもたらしたのは、江ノ島の風流名所としての自立と大山参詣の隆盛である。鶴岡八幡宮へ境内での案内稼と餅菓子を願い出た雪ノ下村民の願書には次のような文言が見られる。「案内之儀平日者勿論石尊(大山)御祭礼中参詣之人多分候処」⁵⁸⁾「右商ひ二付平日者勿論、別而石尊祭礼中参詣人も数多有之候所」⁵⁹⁾とある。また長谷村等三か村より案内稼再開の際提出された請書にも「江ノ島・鎌倉参詣之旅人荷物并道案内之稼致来候所」⁶⁰⁾と記される。当該地域の常套文句だが、見過ごすことのできない文言である。

18世紀に入り本格化した伊勢参宮・大山参詣が一端ピークを迎え⁶¹⁾、江ノ島が元来の霊場としてだけでなく風流の名所として独自の発展を遂げつつあるなど、行動文化の一層の昂揚がみられたのが宝暦・天明期である⁶²⁾。かかる行動文化の進展の影響を受ける形で、鎌倉地域の参詣者構造に変化がもたらされ、都市知識人層とは異質な参詣者が登場したのである。この村落内上位層の行動は、江ノ島における庶民層の風流への志向と同じ動向であろう⁶³⁾。まさしく、都市知識人層に近付こうとする下から主体的に文化的上昇を志向する参詣であり、参詣の低層化・広汎化と表裏一体のものである。

ここまで見てきた都市知識人層と村落内上位層のそれぞれの行動パターンについては、寛政元(1789)年の道中案内記「相州大山順路之記」⁶⁴⁾においても紹介されている。

【史料12】雪の下茶店はたこや多し。鎌倉ハ古キ所にして中々委しくハ見尽しかたし。①よつて爰に逗留して案内させて見るへし。②江の島かまくらと一日に見る人多し。はじめにいふ如く是より山のうちを見て戸塚へ出候、是ハ一通り也。③又江の寫より長谷・大佛・光明寺と見て雪の下に泊り扇ヶ谷より山のうちを見て翌日金澤へ行道也を見る、是か中分なり。

②が村落内上位層の行動形態であり、①が初期都市知識人層、③が2泊3日の旅であり、近世中期以降の都市知識人層の行動形態を指しているものと言えよう。

IV. 名所の形成と参詣者の対応

(1) 名所の確立と歴史知識の構築

名所は景色と古跡が構成要素であるとされる⁶⁵⁾が、『東海道名所図会』⁶⁶⁾に掲載される鎌倉名所を分類してみると次のようになる。

寺院・仏像(37) 神社(7) 廃寺(6) 屋敷

跡 (17) 墓・石塔 (9) 牢 (3)

井戸・水 (14) 川 (2) 橋 (3) 木 (1) 切通・坂 (3) 地名 (20)

他所と比べ、屋敷跡や墓・石塔、廃寺などの名所が複数存在することが鎌倉の特色であろうが、問題はその信憑性である。『東海道名所図会』の記述による限り、123名所中94名所 (76%) が、特定の人物の由緒を有していた。余程記載事項を絞っている名所図会であるから、この数字は高いと言わざるを得ない。その名所図会の鎌倉部に登場する関連人物133名の登場回数を調べると、上位は源頼朝 (16回)、運慶 (9回)、足利尊氏 (6回)、源頼義・頼家・日蓮 (5回)、行基・弘法大師 (4回) となる。縁起、由緒にしては珍しく、英雄的人物よりもむしろ確かな歴史的史実の方に力点がおかれているのではないと思われるほど、その信憑性の高さが窺われる結果である。とはいえ、ここで名所の故事が事実であるか否かを云々することは無意味であり、むしろ参詣者側にとって「もっともらしさ」を与えるものであったという点を

強調しておきたい。

近世以前は、こうした特定人物と結びついた館跡や石塔等の由来は、地元伝承として残存していたものと考えられる。例えば、『新編相模国風土記稿』で頻出する「土人曰」、「土俗」、「里俗」なるものである。この地元伝承が、その後いかに都市知識人層による文献に基づく考証過程を経て名所として確立していくかが問題となる点である。

それでは、都市知識人層がいかなる書物を典拠としていたかだが、表5は『東海道名所図会』に登場する引用本を年代順に並べ、併せて引用回数を示したものである。これによれば、『吾妻鏡』(17)『太平記』(5)『元亨釈書』(4)の三書が多い。名所図会の著者秋里籙島は、頼朝挙兵 (治承4 (1180) 年) から宗尊親王の退任 (文永3 (1266) 年) までを伝える『吾妻鏡』と、正中の変 (正中元 (1324) 年) から細川頼之執事就任 (正平22・貞治6 (1367) 年) までを南朝側から記す『太平記』の二書で大まかな通史を形作り、宗教関連は『元亨釈書』に依拠していた

表5 『東海道名所図会』鎌倉部の引用文献数

	歴史書	軍記物	仏教書	紀行文・日記	地誌等	歌集
古代					倭名類聚抄 (931~8) 1	万葉集 (8C) 4 山家集 (1175) 1
中世	吾妻鏡 (13C末~14C初) 17	保元物語 (1219~22) 1 長門本平家物語 (1220) 2 太平記 (14C) 5 鎌倉大草子 (室町) 1	沙石集 (1283) 2 元亨釈書 (1322) 4	鎌倉紀行 (海道記) (1223) 3 十六夜日記 (1279~80) 1 徒然草 (1329~1331) 1		新古今集 (1210) 1 拾遺愚草 (1216) 1 後堀河百首 (13C初) 1 新後撰集 (1303) 1 夫木集 (1305) 4 藤谷集 (14C初) 3 拾玉集 (1328) 1 新拾遺集 (1363) 1
近世		流布本平家物語 (1623) 2			新編鎌倉志 (1685) 2	
不明				鎌倉記 1		歌枕 2

注) 書名、年代の後の数字は引用回数。

ことが分かる。

その他の都市知識人はどうかと言えば、表6に鎌倉の紀行文に引用された文献とその引用回数を示したが、こちらからも明白に鎌倉に関する歴史知識は『吾妻鏡』・『太平記』によるものであることが分かる。それ以外の空

白期間・空白事項を、『平家物語』・『源平盛衰記』・『梅松論』・『鎌倉（北条）九代記』・『鎌倉大草紙』等の軍記物・歴史物語で補っていた。

ところが、こうした文献を読みこなし知識を得ていた都市知識人でさえ、多彩な書物の

表6 都市知識人層紀行文の引用文献数

	出発年	史料名	出発地・著者	引用文献（鎌倉に関わる部分に限る）
1	寛永10（1633）年11月	鎌倉順礼記	沢庵宗彭（臨濟僧）	新勅撰和歌集
2	延宝2（1674）年5月	鎌倉日記	徳川光圀	吾妻鏡（13）夫木集（5）元亨釈書（4）太平記・東海道名所記（3）大友興廃記・万葉集・海道記・発心集（2）曾我物語・壺囊抄・新拾遺和歌集・関東兵乱記・鶴岡日記・無極抄・大納言公任家集・続古今和歌集・閑斎遠遊紀行・類聚名所和歌・楚忽百首・詞林采葉・後堀川百首・十六夜日記・神社考・発心集・沙石集（1）その他、鎌倉記（松村）・鎌倉物語（中川喜雲）・鎌倉順礼記（沢庵）を参考にした旨の記述あり。
3	延宝8（1680）年4月	鎌倉紀	自住軒一器子（4名）	吾妻鏡（5）太平記（3）
4	宝暦6（1756）年8月	鎌倉三五記	紀伊国屋文左衛門（材木問屋、4名）	なし
5	明和4（1767）年4月	東路の日記	婦人（数名の男女の供）	なし
6	安永8（1779）年	山東遊覧志	隠士葛郭	吾妻鏡（14）太平記（3）長門本平家物語・十六夜日記・梅松論（2）平家物語・夫木集・後堀川百首・万葉集・新古今和歌集・東宝記（1）
7	寛政9（1797）年閏7月	相中紀行	田良道子明甫（下野国烏山藩藩医、2名）	吾妻鏡（41）太平記（4）元亨釈書（3）北国紀行・鎌倉九代記・平家物語・鎌倉大日記（2）十六夜日記・北条五代記・上杉禅宗記・夫木集・梅松論・鎌倉年中行事・鎌倉大草子（1）
8	享和1（1801）年1月	三浦紀行	白英（俳人、4名）	後堀川百首・北国紀行・沙石集・太平記・十六夜日記・千寿謡（1）
9	文化2（1805）年9月	江の島	大島完来（俳人、3名）	新編鎌倉志・吾妻鏡（1）
10	文化4（1807）年3月	我衣	加藤曳尾庵（医師・寺子屋師匠、28名）	なし
11	文化6（1809）年4月	鎌倉日記	扇雀亭陶枝（商人、家族・供数名）	新編鎌倉志・吾妻鏡（2）徒然草（1）
12	文化11（1814）年5月	鎌倉三勝日記	岩村恭久（狭山藩士、3名）	なし
13	文化12（1815）年4月	我衣	加藤曳尾庵（医師・寺子屋師匠、2名）	なし
14	文政4（1821）年4月	江の島の記	菊地民子（豪商佐野屋の妻）	なし
15	文政4（1821）年	遊歴雑記	十方庵敬順（真宗僧侶）	太平記（1）
16	天保6（1835）年4月	鎌倉御覧日記	小山田与清（考証学者）	新編鎌倉志・元亨釈書・臥雲日件録（1）
17	天保10（1839）年4月	玉匣両温泉路記	原正興（沼田藩抱学者か）	吾妻鏡（2）源平盛衰記・太平記（1）
18	弘化2（1845）年1月	江ノ島参詣之記（書写）	森七三郎（吟味役）	なし
19	安政2（1855）年4月	江の島紀行	李院（女性）	なし
20	年不詳5月	鎌倉日記	祖祐（男女5名）	なし

中において民俗伝承に疑問を呈しつつも、完全否定することができなかった。それはある一書の影響があったからである。その書とは、『新編鎌倉志』（貞享2（1685）年）である。延宝2（1674）年徳川光圀が自ら行った現地調査の結果に基づき編纂された地誌である。この影響は甚大であり、少なからず事実誤認を含みつつも多くの名所伝承が文献により裏付けられ、鎌倉名所の原型を形成することとなった。増補版とも言える後年の『鎌倉攬勝考』（文政12（1829）年）と比べても分かるが、決して鎌倉内の名所は大幅に増加はしていない⁶⁷⁾。これは、水戸徳川家・水戸学派の編纂した『新編鎌倉志』が名所各々に権威を与え、後の都市知識人層に対して基本的な信頼性を与えたからである。そのことが新しい名所の創造を拒んでいたのである。

後の『鎌倉攬勝考』（文政12（1829）年）や『相州大山順路之記』（寛政元（1789）年）などは、大概を『新編鎌倉志』に依拠している。また江戸の葛郭による『山東遊覧志』（安永8（1779）年）や下野国烏山藩医による『相中紀行』（寛政9（1797）年）のように、故事来歴を述べる部分に『新編鎌倉志』との類似性を指摘できる紀行文がいくつか見受けられる。かかる場合は、『吾妻鏡』・『太平記』の知識は『新編鎌倉志』から断片的に得ていた可能性さえ考え得る。

では、『新編鎌倉志』により歴史的考証過程を経て比定された「畠山重保石塔」の事例をみてみよう。延宝2（1674）年の調査時では、

【史料13】大鳥居ノ西ノ柱ノ側ニアリ。明徳二年、比丘道友ト刻テアリ。文字分明ナラズ。畠山六郎ガ為ニ後ニ立タルカ不審⁶⁸⁾

として、畠山重保のために建てられたのかははっきりとしないとしていた。同時期、畠山石塔を訪れた『鎌倉紀』の自住軒一器子は、

【史料14】末の鳥居の右の松なみの中に古き石塔あり。所の人それなん畠山の石塔と云。立より見るに明徳四年癸酉と有。かぞふれば式百八十余年に及べり。然れば此畠山は秩父の重忠の類か、それならば平氏にて五百年に及べり。その子孫の程経て後に追福の為に石塔を立しにや。又明徳年中ならば足利の畠山国清が氏族にや、それならば源家にて此年号の比にあへり、いづれの云伝へにやと尋ねれ共、こたへ分明ならず⁶⁹⁾

と考察して、土地の人に尋ねたところ、やはり畠山の詳細は不明であった。

ところがである。光圀が現地調査の段階では何ら確証がないとしていたにも関わらず、『新編鎌倉志』の編纂作業において、『吾妻鏡』の記事を根拠に、重保石塔と断定してしまった。そして畠山重忠の石塔だとする里俗を完全否定した。それが、以下の文章である。

【史料15】畠山重保石塔は、由比濱にある五輪を云。明徳第四、癸酉霜月日、大願主道友と切付てあり。年號、重保より遙後なり。按ずるに【東鑑】に（中略）里俗、或は畠山重忠が石塔と指示し、又重忠が屋敷なりと云傳。恐は非ならん。重忠が屋敷は、筋違橋の西北にあり（後略）⁷⁰⁾

地元の伝承では、畠山重忠の墓であると伝えられていたものが、『新編鎌倉志』によって否定された。このため、後の『鎌倉攬勝考』（文政12（1829）年）・『相州大山順路之記』（寛政1（1789）年）・『新編相模国風土記稿』（天保12（1841）年）なども全て『新編鎌倉志』の説を踏襲することとなり、現在に至っている。かかる事例のように、『新編鎌倉志』によって名所伝承が覆された例は鎌倉内でも決して多くはないが、『新編鎌倉志』の影響力を伝える好事例であろう。このよう

に、鎌倉名所は、近世初頭に存在していた民俗伝承（土俗・里俗）が、肯定・否定を問わず、『新編鎌倉志』に掲載されることで公的權威が付され⁷¹⁾、構築されていった。

(2) 参詣者の考証

それでは都市知識人層の名所との関わり方であるが、まずは17世紀段階から見ていくことにしよう。延宝8（1680）年の『鎌倉紀』を事例としたい。自住軒一器子は、三浦泰村一族が、頼朝の墓前で自害したとする『吾妻鏡』の記述の真偽を確かめようとした。

【史料16】東鏡をみれば三浦泰村一族を引つれ頼朝の影前にて二百八十人ならびて生害せしといふ法花堂はここ也。昔を聞て今所をおもひあはせて実否をこころむべし⁷²⁾

こうした歴史学的考証は、他所訪問時にも見受けられる。大仏では、『太平記』の記述にある、北条時行の兵五百人が大仏に宿泊し、風により倒れた堂の下敷きになって全員死亡したとする記述について疑問を呈している。

【史料17】太平記中前代蜂起の時に相模次郎が兵五百余人大風吹て此堂に宿せしに、堂の虹梁折れて残らず死せりとあるはおぼつかなし。五百人いるべき程みえず。此大仏に付ても東鏡は実にて、太平記には文のかざりおほしとあるは思合侍りぬ⁷³⁾

自住軒が『太平記』よりも『吾妻鏡』に高い史料的价值を与えていることも興味深いですが、このように『吾妻鏡』・『太平記』で得た知識を元に、その名所を実地見聞し、史料の記載事項自体の考証を行っている。すなわち鎌倉は史料批判とフィールドワークの場であった。

かかる史料批判的精神に基づく鎌倉参詣

は、19世紀に入るとやや視点がずれを見せる。文献上の記述の考証よりも、史料の無批判的信頼を前提として、目の前にある案内業者、寺の縁起、名所の伝説に批判の目が移った。「史料批判に基づく考証」から「史料批判の伴わない考証」へと変化をしたのである。例えば明和頃より多数文献に登場する案内人・講釈に疑問を呈する記述が散見される。文化4（1807）年の江戸の医師・鑑定家の加藤曳尾庵は、

【史料18】稲村ヶ崎、こゝに案内の者有り。四軒の百姓かわるかわるつとむ。必案内頼べからず。愚智無智の百姓にて、杜撰なることのみ物語也⁷⁴⁾

と述べ、天保2（1831）年の源真澄は、

【史料19】此地の案内人はたゞ建久建保頃の事のみにて夫さへいひひかめ又ハ後より作なせしことのミ多くて更に誠としがたし⁷⁵⁾

としている。さらに稲村ヶ崎には茶屋があり、鎌倉絵図（天保13（1842）年時1枚12文）の講釈を行っていた。文化6（1809）年の江戸の富商扇雀亭陶枝は、この茶屋について

【史料20】いなむらの崎の茶屋に休。ばゞが茶屋といふ由。ここにて鎌倉の絵図をひさぐ。家とじ我は顔に古都の講談す。其いへるところ古歌などのかなちがい、となへ違の詞のはし、はらをかゝへる事になん⁷⁶⁾

と述べ、鎌倉案内稼の説明の誤りを指摘し、やや軽蔑するような記述を書き残している。

17世紀までの鎌倉は、都市知識人層が過去への感慨に浸り、独自の歴史観により孤高に高度な歴史考証をして楽しむだけの場であった。しかるに、次第に文献の記述を疑うよう

な傾向は影を潜め、代わりに文献に絶対的価値を付与していったように考えられる。その表れが宝暦頃より多彩な参詣者が混入するに伴って増えた農間余業的な案内業者などを批判の対象とした記述が生まれたことである。肯定的に捉えるならば、より一層懷古主義的傾向を強める一方で、単なる知識欲の意識に加え、広く実証主義・考証主義的な意識の芽生えていたことを示している。かかる変容は、都市知識人層が一般民衆を相対化して教養人として自覚しつつあり、歴史が教養以上の意義を持たなくなったことに起因する。ここに文化の大衆化の要因を見て取ることができる。

これに対して、村落内上位層は名所形成構造にいかなる影響を及ぼしたのであろうか。既にⅡ章で述べた通り、決まり切った場所のみ訪れる参詣行動の在り方は、非主体的でいかにも意思の介在しないもののようである。道中記の性格上、中小名所を省略したとも考えられるが、全く東域（若宮大路以東）に足を踏み入れない行動形態だけで充分その説明がつくものであろう。

尚かつ村落内上位層の歴史的知識のレベルにも、ある程度の制限を設けなければならない。近年地域社会の文化ネットワークや村落における識字率、書物の普及の解明と併せて「文化的中間層」の「知」・「読み」・「語り」の研究が盛んである⁷⁷⁾。歴史書・軍書という点で言えば、太平記読みが領主層から民衆まで幅広く楽しまれ、治者像・指導者像の共通認識、政治常識を形成し、各階層における自己形成の役割を果たしたとする若尾政希の研究もある⁷⁸⁾。だが、鎌倉内における行動パターンのみを見るならば、歴史書・軍書を受容した思想的背景を見出すことはできない。蔵書として所有し、貸借をした事実があらうと、それを完全に教養としてもものにしたかどうかは別である。『吾妻鏡』や『太平記』を読みこなしているならば、当然鎌倉の東域に

も数多く残る中世の遺跡・遺物・寺社を廻る欲求が発するはずであろう。だが、結果として西域の有名寺社のみにとどまったことは、歴史的知識の受容の度合いに限度を付さざるを得ない。まして歴史書の記述の真偽について考証しえた高度な知識人は村落内においては稀であったであろう。

村落内上位層の主要訪問地に御霊社が入っていることもこのことに起因するのではなかろうか。御霊社の祭神は開発領主の鎌倉権五郎平景政である。景政は、『保元物語』に登場するが、何よりも歌舞伎十八番「暫」（元禄10（1697）年初演）の主人公として有名である。それも、初演当初は主人公が必ずしも景政ではなかったものが、次第に景政に固まっていったという背景があり、民衆の反体制的願望を込めた英雄である。程近い極楽寺への参詣が全くなく、一方で御霊社が参詣ルートに組み込まれたのは、読本や浮世絵を含む大衆文化・芸能などからの、民俗的知に基づく歴史的知識摂取の結果であると考えられる。ともかく、ほぼ固定されていた村落内上位層の参詣ルートの中であって、御霊社は唯一参詣意識が発揮された痕跡を残す場所である。そうであれば、やはり歴史書・軍書からの直接的受容の程度には限界があるだろう。

V. おわりに

鎌倉を事例とし、都市知識人層と村落内上位層という分析概念によって参詣行動を考察してみると、大きく2種類の行動類型が見られた。ひとつが知識欲的参詣に基づく「三所巡り」である。その主体は江戸の知識人層であった。もうひとつが「簡易型」参詣である。その主体は村落内上位層であった。これには分析対象とした史料に伊勢道中記が多く、その経済的・時間的制約、村の先人が書き残した情報による制約などの要因もあり、一概には断定できない。だが、かかる条件を

鑑みても、参詣地が西側の主要名所だけに偏った歴史的事実の背景には、それだけ中世鎌倉に関する歴史知識の受容が少なかったことを念頭に入れなければ説明がつかない。上記のような重層的な要因が絡み合い、村落内上位層を主体とする「簡易型」を形成させていたと考えられる。

また都市知識人層を総体として扱ったため浮き彫りにはならなかったが、表1の16番の小山田与清が鎌倉まで供をした帰洛する智恩院尊昭法親王一行は、本稿でいう「簡易型」に近い。このように都市知識人層のなかには、行動形態からみれば、村落内上位層に近い形態をとるものもあった。逆に村落内上位層にも表3の14番の益子廣三郎のように、「簡易型」の形態を取りながらも知識欲の参詣をみせるものもいた。かかる諸点にも留意しながら、今後の研究は展開をしなければならぬだろう。

だが紛れもない事実として、村落内上位層において、鎌倉を主目的とした道中記史料がほとんど残存していないことを指摘しておきたい。また「三所巡り」を行う事例も寡少である。本来両者ともに鎌倉を主目的とした紀行文・道中記によって比較すべきであろうが、そうした比較を行い得ないこと自体にすでに差異が内包されているのである。その背景としては鎌倉を歴史的名所として十分に認知しうるほど、歴史知識の受容がなされていなかったことがあるのではなかろうか。一方では信仰的側面、すなわち念仏講による光明寺の十夜法要講、鶴岡八幡講、妙法寺の十六日講などの動向も看過できない。しかし彼らも他の大山講・江ノ島講の動向から類推するに、「三所巡り」を行っていた可能性は極めて低いだろう。

江戸の知識人が主に鎌倉を主目的としたのは以下の理由による。知識人の一角をなす武家、僧侶にとって、鎌倉は武家政権の発祥地として、また由緒正しい寺社が薙く地とし

て、まさしく聖地であった。こうしたことから近世初期から知識人層による参詣が行われていた。その行動には考証主義・実証主義が随所に垣間見えるものの、むしろ個人的な歴史観に基づいて孤高に歴史や文学を楽しむ風がみえる。

ところが、元禄期頃までの急激な大規模開発と人口増加、都市生活の向上、自己の身分的不安定感により、懷古主義的な思想が都市知識人層の間に共有されていった。過去への関心はすでに17世紀の知識人にも見受けられたが、18世紀以降のそれはもっと切実で内面化されたものであった。それは、永遠で確かな物、遠くかけ離れた物への憧憬、つまり中世への懷古、古典・歴史の再評価などに結実した。

19世紀に入る頃になると、その考証主義は普遍化の様相を呈するも、陰りが見えはじめた。これは、知識人層にとって歴史的素養が自己満足の範疇に留まるものではなく、庶民参詣層を相対化しての教養人として自覚する手段としての意味しか持たなくなったことを示している。これに対応して、都市中下層民や村落民といった庶民参詣層が文化的に上昇を志向し、都市知識人層を追従した。彼らは都市知識人層と表面上同種の参詣行動に参加していったが、そこには主体性が垣間見えるも、その内実は文化的受容形態として依然異質な部分を残していたのである。「文化の大衆化」と一口に言ってもかかる側面を内包していたと言えるだろう。「知的充足感」もまた然りである。

他者から促されるわけではなく、自己のなかに歴史意識をいかに萌芽させていたかという意味においては、私的歴史意識の形成は村落民の間に見出すことは困難である。やはり民衆は、公的な場において促される形で公的歴史意識を形成していったと考えるのが妥当であろう。

(日本学術振興会特別研究員)

〔注〕

- 1) 鈴木章生『江戸の名所と都市文化』, 吉川弘文館, 2001。
- 2) 表智之「歴史の読出し／歴史の受肉化」『江戸の思想』7, ペリかん社, 1997, 72～97頁。
- 3) 尾藤正英「日本における歴史意識の発展」『岩波講座 日本歴史』22, 岩波書店, 1968, 1～58頁。
- 4) 前掲3), 48頁。
- 5) 前掲3), 50～58頁。
- 6) 大友一雄『日本近世国家の権威と儀礼』, 吉川弘文館, 1999。井上攻『由緒書と近世の村社会』, 大河書房, 2003。山本英二「浪人・由緒・偽文書・苗字帯刀」, 関東近世史研究28, 1990, 23～50頁。同「甲斐国『浪人』の意識と行動」, 歴史学研究613, 1990, 120～130頁。吉岡孝「八王子千人同心の身分と文化—近世後期における文化と地域編成—」, 関東近世史研究32, 1991, 27～47頁。岩橋清美「近世後期における歴史意識の形成過程—武蔵国多摩郡を中心として—」, 関東近世史研究34, 1993, 8～34頁。同「近世社会における『旧記』の成立」, 法政史学48, 1996, 64～78頁。
- 7) 白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』, 思文閣出版, 2004。
- 8) 羽賀祥二『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識—』, 名古屋大学出版会, 1998。
- 9) 安丸良夫『近代天皇像の形成』, 岩波書店, 1992。
- 10) 前掲8), 第1章及び第10章の尾張徳川家と紀伊徳川家の事例による。また, 白井哲哉氏によれば, 幕府が積極的に地誌編纂に乗り出すのは同じく享保期であるとされる(前掲7)。
- 11) 久留島浩「百姓と村の変質」, 『日本通史』近世5, 岩波書店, 1995, 69～110頁。
- 12) 前掲3)。
- 13) 前掲3), 3～5頁。
- 14) 柴田一「近世豪農の学問と思想」, 新生社, 1966。
- 15) 塚本学『地方文人』, 教育社, 1977。
- 16) 横田冬彦「益軒本の読者」横山俊夫編『貝原益軒』, 平凡社, 1996, 315～353頁。横田冬彦「近世民衆社会における知的読書の成立」『江戸の思想』5, ペリかん社, 1996, 48～67頁。横田冬彦「近世村落社会における〈知〉の問題」, ヒストリア159, 1998, 1～27頁。
- 17) 若尾政希『「太平記読み」の時代』, 平凡社, 1999。同「政治常識の形成と『太平記』」, 歴史評論611, 2001, 34～49頁。同「近世人の思想形成と書物—近世の政治常識と諸主体の形成—」, 一橋大学研究年報社会学研究42, 2003, 111～173頁。
- 18) 青柳周一「近世後期の絵図・地誌作成と「旅行文化」—近江の旅行史関係史料から—」, 民衆史研究67, 2004, 3～21頁。上杉和央「近世における浪速古図の作成と受容」, 史林85-2, 2002, 33～73頁。
- 19) かかる研究は, 歴史学において盛んだが, 地理学においても取り組まれている。上杉和央氏は, 本居宣長を対象として, 地理的知識の形成過程を, 書物や旅行体験などから詳細に追った。道中記研究においても今後重要な視点であると思われる(「青年期本居宣長における地理的知識の形成過程」, 人文地理55-6, 2003, 18～39頁。)
- 20) 竹内誠「庶民文化のなかの江戸」竹内誠編『日本の近世』14, 中央公論社, 1993, 51頁。
- 21) 原淳一郎「近世参詣地名所における参詣者意識—江戸十里以上の江の島参詣—」, 交通史研究51, 2002, 23～44頁。
- 22) 小野寺淳「道中記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」, 筑波大学人文地理学研究XIV, 2001, 231～255頁。
- 23) ①岩鼻通明「道中記にみる出羽三山参詣」, 歴史地理学139, 1987, 1～14頁。そのほか, ②高橋陽一「多様化する近世の旅」, 歴史97, 2001, 105～133頁。
- 24) 鎌倉市市史編さん委員会編『鎌倉市史—近世近代紀行地誌編—』, 吉川弘文館, 1985。
- 25) 澤寿郎「鎌倉古絵図篇」『鎌倉 古絵図・紀行』, 東京美術, 1976。白石克「鎌倉名所記」初版について」, 斯道文庫論集14, 1977, 307～343頁。同「江戸時代の鎌倉絵

- 図一諸版略説一」, 三浦古文化34, 1983, 61～100頁。
- 26) ①鈴木良明『近世仏教と勸化』, 岩田書院, 1996。②同「浮世絵版画と名所地一金沢八景・鎌倉・江嶋・大山一」『都市・近郊の信仰と遊山・観光』, 雄山閣, 1999, 45～62頁。③岸本覚「長州藩祖廟の形成」, 日本史研究438, 1999, 1～25頁。④加藤紫識「鎌倉名所記」一版行とその周辺一, 東洋大学大学院紀要38, 2002, 299～324頁。
- 27) 深谷克己『綱ひきする歴史学—近世史研究の身構え—』, 校倉書房, 1998, 198頁。
- 28) 「塔沢紀行」神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編『神奈川県郷土資料集成』第6輯紀行篇, 神奈川県図書館協会, 1969, 373頁。
- 29) 「新編鎌倉志」『大日本地誌大系24 新編相模国風土記稿第六巻』, 雄山閣, 1980年, 1～9頁。
- 30) 「鎌倉攬勝考」(前掲29) 163～175頁) では、『新編鎌倉志』において鎌倉の一名所として扱われていた江ノ島と金沢が、鎌倉と切り離され、独立した名所として取り扱われている。
- 31) 「丙辰紀行」, 前掲24) 4頁。
- 32) 「鎌倉紀」, 前掲24) 113頁。
- 33) 前掲32), 132頁。
- 34) 尾藤正英『日本の歴史第19巻 元禄時代』, 小学館, 1975, 345～346頁。
- 35) 鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 旧記雑録追録』6, 1975, 565～566頁。
- 36) 「毛利十一代記 巻之百二 清徳公記」, 東京大学史料編纂所蔵冊子本, 53～59頁。この経過については, 前掲26) ③に詳しい。
- 37) 「東遊記」, 前掲24) 213頁。
- 38) 「三浦紀行」, 前掲24) 262頁。
- 39) 「鎌倉日記」, 前掲24) 361～362頁。
- 40) 前掲39) 364頁。
- 41) 「我衣」森銑三他編『日本庶民生活史料集成』15, 三一書房, 1971, 319頁。
- 42) 「四親草」前掲『神奈川県郷土資料集成』第6輯紀行篇, 125・146頁。
- 43) 「滑稽江ノ嶋土産」神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編『神奈川県郷土資料集成』第7輯紀行篇続, 神奈川県図書館協会, 1972, 153頁。
- 44) ジョン・アーリ, 加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』, 法政大学出版局, 1995, 79～80頁。
- 45) 西川長夫「ロマン主義を考える三つの視点」西川長夫他編『ロマン主義の比較研究』, 有斐閣, 1989, 1～33頁。
- 46) 前掲45) 3頁。
- 47) 前掲45) 17・29・32～33頁。
- 48) 前掲34)。
- 49) 粕谷宏紀監修『新訂東海道名所図会下』, ベリかん社, 2001。
- 50) 前掲32) 118頁。
- 51) 「遊歴雑記第四編巻之中」, 前掲24) 331頁。
- 52) 秋葉参詣をはじめとして, 各所で各人の訪問地選択の様相が窺え, 情報的制約の中にあっても一定度の恣意性を見出せる。
- 53) 「差上申御請一札之事(案内人不正取締一件)」澤壽郎編『鎌倉近世史料 長谷・坂之下村編』, 鎌倉市教育委員会, 1975, 269～270頁。
- 54) 「鶴岡八幡宮御用留」鎌倉市市史編さん委員会編『鎌倉市史 近世資料編一』, 吉川弘文館, 1986, 273～277頁。この御用留に書き控えられた別の願書より, 雪ノ下村の案内業者17名の名前も判明する(同書, 272頁)。彼らも, 長谷村・極楽寺村の案内業者と同じく, 雪ノ下の旅籠屋への斡旋収賄を行っていたのか, 鶴岡八幡宮内における案内稼ぎを禁じられている。また同史料による限り, 雪ノ下の案内稼ぎはあくまでも鶴岡八幡境内における案内稼ぎであったように読み取られ, 鎌倉内を広域に案内する者は長谷村等三か村の村民であったとも考えられる。
- 55) 前掲54) 273～277頁。
- 56) 前掲53)。また「御用留」によれば, 鶴岡の役人より渡される鑑札は, 200文の手数料がかかり, 毎年改札であった。
- 57) 前掲54) 277頁。
- 58) 前掲54) 272頁。
- 59) 前掲54) 273頁。
- 60) 前掲54) 275頁。

- 61) 伊勢参宮・西国巡礼の道中記を検討した小野寺淳（前掲22）・高橋陽一（前掲23）②の両氏の論考によれば、それぞれ宝暦13（1763）年、明和元（1764）年から道中記が多く残存するようになっている。また大山参詣との関連で言えば、大山参詣者が江ノ島・鎌倉参詣に参入していくのも同時期である（原淳一郎「大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向―藤沢・江ノ島・鎌倉との関連で―」、史学70-2、2001、1～22頁）。こうしたことから、宝暦・天明期は文化史上特筆すべき時期である。
- 62) 西山松之助「江戸の町名主斎藤月岑」西山松之助編『江戸町人の研究』4、吉川弘文館、1975、461頁。比留間尚「さまざまな行動文化」前掲20）319～320頁。
- 63) 前掲21）。
- 64) 「相州大山順路之記」、東京国立博物館所蔵。
- 65) 鈴木章生「名所記にみる江戸周辺寺社への関心と参詣」、地方史研究協議会編『都市周辺の地方史』、雄山閣、1990、124～125頁。
- 66) 前掲49）。
- 67) 前掲26）④表1において、正徳から安政までの「鎌倉名所記」の掲載名所が全て表示されているが、この表をみても鎌倉内名所が増加したとは言えない。
- 68) 「鎌倉日記」、前掲24）72頁。
- 69) 前掲32）122頁。
- 70) 前掲29）125頁。
- 71) エリック・ボブズボーム、テレンス・レンジャー編、前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』、紀伊国屋書店、1992。本書は、伝統は実は様々な意図を持って創られたものであるとする構築主義的立場による研究である。鎌倉名所も水戸藩による政治的意図を以て、民俗伝承が名所の正統な由緒として構築された好事例であると考えられる。
- 72) 前掲32）113頁。
- 73) 前掲32）123頁。
- 74) 前掲41）105頁。
- 75) 「雨降山の日記」、国立国会図書館所蔵。
- 76) 「鎌倉日記」、前掲24）285頁。
- 77) 前掲2）、15）、16）および小林准士「近世における知の配分構造」、日本史研究439、1999、72～102頁。塚本学『生きることの近世史』、平凡社、2001。杉仁『近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流―』、吉川弘文館、2001。
- 78) 前掲17）。

Pilgrimages and Historical Consciousness in the Early Modern Age:
Rediscovery of Kamakura and a Retrospectivism

HARA Jun-ichiro

There are two purposes for this paper: the first is to understand the people's consciousness of Kamakura and the reality of pilgrimages to Kamakura and to examine a pilgrimage history from the point of view of intellectual satisfaction; and the second is to study the relationship of these findings with the history of the development process of historical consciousness and the structural history of culture and intelligence. I focus on these points because I think the difference in the forms of pilgrimages to Kamakura is strongly associated with the development process of culture and historical consciousness of the early modern Japanese people. Here travel journals are classified into two types: those written by "urban intellectuals" and those written by "upper class villagers." The classification is used as the core of the conceptual framework.

Although it was once the center of the politics, Kamakura had totally to a mediocre farming village in the beginning of the Edo period. After that, however, it gradually regained popularity as a tourist spot. Partly because the Tokugawa Shogunate claimed itself as a legitimate successor of the Kamakura Shogunate, Kamakura was regarded as a Mecca of samurais in the seventeenth century, being frequented by samurais, priests and scholars. Having a high educational background, they indeed liked to study history solitarily, putting an emphasis on verifiability and objectivity. Nevertheless, from the Genroku era, the urban intellectuals' visits to Kamakura became more subjective, though sustaining verifiability. This change was triggered by the sluggish economy causing people of all classes to feel anxious about their social positions. As a result, the urban intellectuals had come to develop a greater interest in something secure or eternal, and even toward the Middle Age, in which a retrospective trend can be recognized. Here we can see a spread of historical consciousness, while its nature had changed with the times.

On the other hand, as with the upper class villagers, a common pattern can be observed in their activities in Kamakura. Most people in this class chose to take a "simple trip," only visiting major temples/shrines in the western area. Trips of this form were rarely taken among the urban intellectuals, who mostly took a "grand tour," spending several days to visit around 40 places of interest. Urban intellectuals also took a "three-spot tour," extending their visits to Enoshima and Kanazawa. Contrarily among the upper class villagers, these forms were seldomly taken, and even a trip with the principal destination set to Kamakura was not common. This suggests that the level of historical and cultural knowledge of the upper class villagers was not very high. Therefore, the historical consciousness of the upper class villagers can be considered to be mostly developed through public occasions.

Key words: pilgrimages, historical consciousness, intellectual satisfaction, Kamakura, retrospectivism